

東筑高等学校校歌の作詞者検証について

- 目次
1. 課題提起
 2. 検証の方法について
 3. 折口信夫作詞による同時期の高校校歌比較検証
 - (1) 校歌歌詞の用語と構成の共通項について
 - (2) 古語・雅語の漢文・文語体から近代文語体へ
 4. 東筑高校校歌と同時期の他校校歌との比較
 - (1) 短歌と「近代詩」の違いについて
 - (2) 東筑校歌の近代詩としての特性
 5. 東筑校歌の作者の推定
 - (1) 東筑校歌作者の条件
 - (2) 東筑校歌の作者が伊馬春部である可能性について
 - (3) 結びに代えて

1. 課題提起

東筑高等学校校歌は、昭和23年の学制改革により、東筑中学から新制の高等高校になったことを記念して新校歌制定が望まれ、国学者の折口信夫に作詞を依頼し信時潔の作曲を得て、昭和27年に制定されたものである。

その昭和27年は、折口信夫の体調が思わしくなく校歌完成が遅々として進まなかったのであり、その事情について『東筑百年史』では

原勝文（32期）教諭らの努力で作詞を国学院大学の折口信夫（歌人、釈迢空）教授に依頼することになり、昭和27年4月下旬、原教諭は作詞の資料を携えて上京、木屋瀬出身の放送作家伊馬春部（鞍手中学卒）氏の尽力を得て作詞が進められた。同年6月には全国商業高校協会会議に出席の際、舟越校長が折口先生に校歌依頼の挨拶に行った。その後、折口先生は神経痛気味で筆がとれず、7月完成と見られていた校歌は、またも暗礁に乗り上げた。しかし、伊馬春部氏の再度のはからいで病気をおして作詞、同年10月23日東筑に送付されて来た。

と記されている。以来母校の東筑高校校歌は、「作詞 折口信夫、作曲 信時 潔」の名曲として親しまれ、現在もなお歌い継がれている。

しかし先年筆者が東筑同窓会のサイトを作成している時に、母校の東筑校歌を掲載するついでに折口信夫作詞に掛る同時期の他校校歌を比較掲示したところ、語彙に共通性はあるもののその歌詞の構成、修辞、言葉の音韻の流れ、リズム感など全く異なることに気付いた。前後2年間に一人の詩人がこれほど雰囲気の違いは書けないものと思われ深く疑念を抱いた。

その後上記の『東筑百年史』や折口信夫全集の校歌・日記・書簡集（中公文庫、全集第31巻）

を見ていくうちに、校歌作詞のために折尾や遠賀川に来訪するような健康状態でなかったこと、同時に依頼されている他校校歌もままならなかったことが判り、折口信夫は東筑高校校歌、それも他校校歌とは詩想の全く違うこの校歌は書けなかったのではないかと思われた。

しからば誰がこれを書いたかとするに、『東筑百年史』にいう「しかし、伊馬春部氏の再度のはからいで病気をおして作詞」の文面が、実にあっさりと書かれていることに気付いた。「再度のはからい」とは何か。これは伊馬春部が大いに関わっていることを変に隠したような文章に見える。

本論では、筆者が当初疑問をもった東筑高校校歌と折口作の他校校歌の違いを紹介しながら、また一般的な学校校歌とも詩想の違う、そのユニークな東筑校歌の作者が伊馬春部である可能性を試論として検証してみたい。

2. 検証の方法について

もしそのような疑念で校歌を見る場合、問題はそうした東筑校歌の作詞の状況が、関係者により秘匿されてしまっていることである。もとより学校側の要請は、国学民俗学の碩学折口信夫先生のような著名な方に校歌作詞をお願いしたかったことにあるので、伊馬春部は自分が手伝ったとも言えなかった。あくまで折口先生の作とし周辺の事情を一切明らかにしなかった。

後述で東筑高校校歌の異質性・特異性…筆者はそれを成功例とするものであるが…を検証していくが、その変貌した校歌作詞作法について大いに語られるべきはずか、全集収蔵の折口信夫の書簡や年譜には、「東筑」の二字すら見えない。むしろ「折口さんが一日遠賀川の流域に立って考えたという伝説が残っている。」「折口さんの案内に原教諭が高いハイヤー代を安月給から自前で出した。」等の作られた伝説が校歌制定当時から流布されている。

全く新たな折口信夫もしくは伊馬春部の書簡でも発見されない限り、当時の関係者の作為を明らかにすることは文献的に実証することはできないと思われる。

残された方法は、やはり筆者の第一感で違いをみた校歌群そのものを虚心に分析していくしかない。幸いにして新制高校校歌のための作詞依頼が多数あったためか、同時期の校歌が多く類型を得やすいのであり、これを並べて読んでいき東筑校歌の特性を抽出したい。

なお本稿の目的は、東筑校歌制定にあたっての疑念を仰々しく騒ぎ立てるものでない。むしろ折口信夫・伊馬春部の麗しき師弟愛や当時の学校関係者の大らかさ、精神の豊かさを追慕するところである。また方法において他校校歌を比較の俎上に乗せているが、あくまで詩の作法、修辞の違いを明らかにするためであり、偏頗な母校愛、身最良のものでないことを断言しておきたい。

3. 折口信夫作詞による同時期の高校校歌比較検証

折口信夫には、学校校歌、寮歌の作詞は30個ほどの作品があるが、戦後の新制高校に因んだ校歌制定は各地で急がれており、昭和24年から昭和28年(制定)に15校の高校校歌作品がある。特に昭和26年、27年が多いが、神経痛が悪化した昭和27年は、苦痛に耐えながらも『日本古代抒情詩集』『民族史観における他界概念』の研究をしており多忙であったと思われる。

そして書簡集からは、昭和26年の石川県大聖寺高校、羽咋高校校歌は折口自身の作とみられるが、それ以降の校歌関連の書簡は見当たらない。また折口信夫は、もとより日記を付けなかつ

たので校歌関連の情報はこれ以上は無い。

特に昭和27年に制定された校歌群は、折口信夫の症状からして、その出身地元にも明るい弟子達が、依頼されていた高校の校歌作詞を相当程度手伝ったか、代作したのではないかと想定され、東筑高校校歌はそのひとつの典型と考えている。

その15校の高校校歌を眺めてみたい。後述の各校歌比較に資するために別冊としたので、先ず全15校歌を丁寧に読んでいただきたい。

その製作時期の間には、中学校校歌、小学校校歌が5個あるが、校歌は読み手の生徒のレベルに歌詞を構成しているはずであり、ここでは比較対象として高校校歌のみを抽出した。また校歌の製作と当該学校での正式制定にタイムラグがあり、実際の製作時期は、校歌間で前後すると考えられるが、本稿では著述総目録の記載順に並べた。なお旧字体のものは、なるべくそのままに掲示した。

なお折口信夫の学校校歌は、全て折口信夫名であり雅号の「釈 超空」でない。これは折口自身が峻別していたのであろう。折口信夫の詩と短歌の向き方に位相があったものと考えられる。

(1) 校歌歌詞の用語と構成の共通項について

これら15校の校歌を通じて、頻出する言葉に出会う。それは「とよむ」「とりよるふ」「しづか」「しづかなる」などであり、折口信夫の得意のロゴなのであろう。

他に「勤しむ」「潔し」などが散見される。

高校名	とよむ とりよるふ	しづか、しづかなる
金沢二水高校	衢の音とよみ来る	×
上田千曲高校	×	しづかなる夢霞む上田城
氏家高校	×	×
塩釜高校	文化の潮の下とよみ	×
瀬戸高校	とりよるふ山の木々	×
大聖寺高校	とよみくる街のおと	静かにむかふ窓の前
羽咋高校	×	×
桔梗が原高校	とよみ来るものの音	×
佐沼高校	×	しづかなる夜の思ひ
八戸市立工業高校	×	しづかに暮るる夜の燈に
下妻第二高校	×	しづかに燃ゆる窓の燈に
東筑高校	×	×
三戸高校	とりよるふ名久井岳	しづかに更くる馬淵川
茂木高校	鳴りとよむ汽笛のひびき	しづかなる夜となり行れば
鳥羽高校	×	しづかにひびく汐の音

次に詩の外形において、昭和26年2月の大聖寺高校校歌の以降は、歌詞1番が「朝」、2番が「昼」(晝)、3番が「夕・夜」のイメージで形式統一されていることに気付く。

高校名	1番=朝	2番=昼	3番=夕・夜
金沢二水高校	美しき暁や	×	×
上田千曲高校	×	×	×
氏家高校	×	×	×
塩釜高校	×	×	ゆふべかかぐ思索の燈
瀬戸高校	朝空にふりさけて	×	×
大聖寺高校	朝なり晴るる山なみ	晝なり鐘ぞ鳴りひびく	夜なり高く燈をあげて
羽咋高校	沙丘に朝の日ぞのぼる	晝風ぎわたる野を越えて	ゆふべとどろく邑知湯
桔梗が原高校	朝目よし桔梗が原	水無月の眞晝の峰	夕煙立ちわかるる
佐沼高校	朝空に垣とせり	晝深させせらぎは	栗駒の空夕やけて
八戸市立工業	暁の光りほおよぶ	眞晝 空片かげりして	しづかに暮るる夜の燈
下妻第二高校	明け来たるあけきたる	晝深し ひるふかし	夜となりぬ夜となりぬ
東筑高校	澄みわたる朝の幻	汽罐は晝を鳴りわたる	さ夜深き皿倉おろし
三戸高校	朝戸開かむいでわれら	昼なりとよむ町にして	反省の夜となりにけり
茂木高校	朝の風 山より到り	晝の日は田の面に反し	しづかなる夜となり行
鳥羽高校	若きわれらの朝の声	竝びよろしきの晝の風ぎ	夕さり来る窓の上に

またこの朝昼夜には、共通のイメージが配当されている。

即ち、朝は「若さ・若人の澁刺とした姿」、昼は「勉強・学問、学校、先輩学友」、夜は「静かな反省の時、または思索の時間」である。

以下では、朝昼夜の構成が明確な大聖寺高校校歌以降で、言葉として提示されている文節を列記してみる。

高校名	1番=朝	2番=昼	3番=夕・夜
大聖寺高校	ここに生いたち身はわかし	ああ学問と散策と	静かに向かう窓の前
羽咋高校	使命はいよいよ若わかし	×	×
桔梗が原高校	×	ああ学問の空ひろく	×
佐沼高校	若き禮讓 里に充つ	日々に学問新しく	しづかなる夜の思ひ
八戸市立工業	若わかし そこに勤しむ	×	けふの一日を省みむ
下妻第二高校	若きわれらに朝は来ぬ	澄める湛へはわが知識	思ひはろけくオオすぐれ
東筑高校	吾らかく 若々し	すがすがしわが学校	×
三戸高校	聴け わがあぐる朝の声	勤しむ友の額を見よ	今日は悔いなく過ぎにしか
茂木高校	疾く起きて をちこちす	聲張りて 書讀めば	×
鳥羽高校	若きわれらの朝の声	わが読む本の行と行	一日のあとを省みむ

(2) 古語・雅語の漢文・文語体から近代文語体へ

学校校歌として歌い易いかどうかは別にして、全編に難しい古語、漢語、漢文調が散りばれた文語体の歌詞が多い。

戦時中の観念的で大仰な言語の氾濫に対する反省あるいは反撥から、戦後の文芸は、リアリズム、

写実主義、写生からスタートした。しかしそればかりでは「抒情」表現に欠け、膨らみが無くなってしまふことから戦前の「日本浪漫主義」作品群への一時的回帰があったと聞く。

「釈 超空」の短歌が、それほど難しいものでないことを思うと、この昭和24年、25年の「擬古的」と思える漢語、漢文調の歌詞は、そうした影響があったのではないかと思われる。それでも金沢二水校歌の文体より、2、3年の内に比較的読みやすい文体に変化して来ていることは見て取れる。同時に歌詞も長くなって来ており、一つの言葉で小世界を表現する「短歌」「漢詩」から言葉の構成で意図を提示する「近代詩」に作法が変わってきたのではないかと思う。

高校名	難しい古語、漢語、漢文調の部分
金沢二水高校	轟 <small>しゆく</small> として風 <small>かぜ</small> に立つ、 つきせざる <small>れいたく</small> を靈澤 <small>よそ</small> に 擬 <small>ねい</small> へ言 <small>ご</small> ふ我が誇 <small>こほ</small> り
上田千曲高校	千曲川 <small>ゆほひか</small> 汪洋 <small>しん</small> に行 <small>ゆ</small> くきはみ、 然 <small>しか</small> 遠 <small>とほ</small> きわが文化興 <small>きん</small> しなむ、 人心 <small>にんしん</small> 枉 <small>かた</small> げざりし
氏家高校	たをやかに <small>をとめ</small> 處女 <small>むすめ</small> さびする、 純心 <small>ひたごころ</small> うち <small>うち</small> にたもちて、 整 <small>ととのほ</small> れ 紳士 <small>しんし</small> の道 <small>みち</small> に
塩釜高校	ふりさけ見る沖 <small>おき</small> 晴 <small>は</small> れて、 あした開 <small>あ</small> く澄 <small>すみ</small> める窓 <small>まど</small>
瀬戸高校	窯 <small>かまど</small> 々に照 <small>あ</small> る炎天雲 <small>えんてんうん</small> を焦 <small>あ</small> す時 <small>とき</small> 、 藝 <small>げい</small> と學 <small>がく</small> 相 <small>あ</small> かなひ
大聖寺高校	ひとつに享 <small>あ</small> ぐる若 <small>わか</small> き幸 <small>さい</small> 、 ああ 人文 <small>じんぶん</small> のき <small>き</small> はみなき
羽咋高校	微妙 <small>びまう</small> じき思 <small>おも</small> ひ胸 <small>むね</small> を揺 <small>ゆ</small> り、 郷 <small>さと</small> は 禮讓 <small>れいじやう</small> 和 <small>わ</small> みなむ
桔梗が原高校	毅 <small>い</small> くして 嫺雅 <small>かんが</small> なる
佐沼高校	若 <small>わか</small> き禮讓 <small>れいじやう</small> 里 <small>さと</small> に充 <small>み</small> つ、 悉 <small>しつ</small> 皆 <small>みな</small> 田 <small>で</small> に墾 <small>くわん</small> りし祖 <small>そ</small> 々の
八戸市立工業	姑 <small>しよ</small> し天雲 <small>てんうん</small> 霽 <small>は</small> れむ間 <small>ま</small> ぞ、
下妻第二高校	思 <small>おも</small> ひはろけく 才 <small>さい</small> すぐれ
東筑高校	大獅子 <small>おほししよ</small> 吼 <small>こゑ</small> して 汽 <small>き</small> 車 <small>くるま</small> 来る
三戸高校	明日 <small>あした</small> のかま <small>ま</small> えは足 <small>あ</small> らへりや
茂木高校	疾 <small>はや</small> く起 <small>た</small> ちて をち <small>ち</small> ちす、
鳥羽高校	竝 <small>なら</small> びよ <small>よ</small> ろしきの晝 <small>ひる</small> の風 <small>かぜ</small> ぎ

以上の検証から折口信夫の（または弟子達の）高校校歌は、当初の短歌技法から次第に校歌パターンを構成して来て、大聖寺高校校歌以降は、朝・昼・夜の構成とそこに一定のイメージを配当し、かつその地域の特性を盛り込んだ、学校校歌の作詞技法を形成したものと考えられる。

4. 東筑高校校歌と同時期の他校校歌との比較

上記のような折口信夫作の高校校歌の類型を踏まえて、しかし東筑高校だけがその内実において他校とは大きく違っているという本稿の目的に進んでみたい。

昭和24年製作の金沢二水高校、上田千曲高校、氏家高校の初期の校歌群が、折口信夫本来の歌い方と思われるが、ここでは東筑高校校歌と前後する次の5校の校歌を比較対象とした。

【大聖寺高校、羽咋高校、東筑高校、三戸高校、茂木高校、鳥羽高校】

大聖寺、羽咋両校校歌は、昭和26年2月の書簡から折口自らの作ということが明白である。三戸高校校歌は、東筑高校校歌とまったく同時期であり、茂木高校、鳥羽高校両校校歌は、制定期日からみて東筑校歌製作より2、3ヶ月後の製作時期と推定される。但し、東筑高校校歌以降は、体調が思わしくなく入院した期間であり、所収の書簡集にもこの4校の校名は見えず、弟子

達が製作代行した可能性は拭いきれない。

因みに、傍系の試論となるが、青森県立三戸高校校歌を読んでいて、八戸市立工業高校校歌に構成や主張するところが非常によく似ていると思う。これも青森の八戸・三戸方面出身か、この方面に土地勘のある弟子が代作したものでないかと想像している。後述で詳しく検討したい。

(1) 短歌と「近代詩」の違いについて

上記で折口作の高校校歌は、当初の短歌技法から次第にパターンを形成して来て詩作技法に変化してきたとしたが、ここからの分析において「近代詩」のイメージでフィルターを掛けて各校歌を見ていくので、筆者の考える短歌と「近代詩」の違いを定義しておきたい。

短歌は、現前世界の事象・事物を表示しながら、そこから醸し出される余情・余韻を読み手・聞き手と共有する同一次元の表現手段であり、「近代詩」は、そこから更に反省的に「昇華・結晶させた認識」へ、また別次元へと誘^{いざな}う^{いざな} 作為の表現手段であると解釈する。

また他者に何ものかを伝える手段の文字列形式として、短歌には三十一文字の制限があり、各語句の意味が共通認識されなければ作品として成り立たない。「近代詩」は、字数の制限がないものの、だらだら綴ってはならず、最終的に全ての語を一つの詩想に集約させ、作品意図を取り結ばなければならないという制約も、基本的な違いになる。

(2) 東筑校歌の近代詩としての特性

こうした詩作の意味を踏まえて、東筑校歌と同時期の他校校歌を比較してみた。

a. 東筑校歌の絶妙な言葉の組み合わせ

東筑校歌は、全編に詩的言語で構成されているということが一瞥のもとに了解される。その言葉と言葉の絶妙な組合せにおいて鮮やかな表現が現出している。

その端的な例は、他校と共通にある朝・昼・夜の提示を比較するとよく判る。

ここでは異質な雰囲気を感じていただくために、東筑校歌を比較末尾においてみた。

高校名	朝の提示	昼の提示	夜、夕の提示
大聖寺	朝なり 晴るゝ山なみに 今日の日ひろくさしわたる	晝なり 鐘ぞ鳴りひびく 知識は胸をかぶやかし	夜なり 高く燈をあげて 静かにむかふ窓の前
羽咋	沙丘に朝の日ぞのぼる みな出でて見よ 水や空	晝風ざわたる野を越えて ひびく 羽咋の杜の鐘	ゆふべとどろく邑知鴻 はるばる霞む気多の浦
三戸	山は青空 今日も晴 朝戸開かむ いでわれら	昼なり とよむ町にして 秩序しづけき山に野に	しづかに更くる馬淵川 反省の夜となりにつけり
茂木	朝の風 山より到り 野に吹きて すがしき時	晝の日は、田の面に反し わが額 汗に光	しづかなる夜となり行けば 田居 野面 谷の入りまで かがやかに 燈影列る
鳥羽	ここに集ひてうちあぐる 若きわれらの朝の声	答志、菅島、坂手島 並びよるしきの晝の風ぎ	夕さり来る窓の上に 我また一つ燈をあげて
東筑	響灘 玄海の波 澄みわたる 朝の幻	大獅子吼して 汽車来る 遠賀川橋 霧地に 汽罐は晝を鳴りわたる	さ夜深き 皿倉おろし ともし火を 高くかかげよ

他校校歌は、「朝なり」「朝の日」「朝の風」「朝の声」「晝なり」「晝の風」「晝の日」「夜なり」「反省の夜」「しづかなる夜」「夕さり来る窓」であり、朝昼夜は単なる時制として扱われている。その反対に東筑校歌は「澄みわたる朝の幻」「汽罐は晝を鳴りわたる」「さ夜深き 皿倉おろし」であり、時制でなく一つの景色を見せていることが判る。

大聖寺高、三戸高のように、昼の情景を「昼なり」と言ってしまうのは、これは詩でなく報告文章になってしまう。同じ「晝」を東筑校歌はどのように扱うか、少し詳しく見てみたい。

「汽罐は晝を鳴りわたる」

広く明るい遠賀川をシュッシュ、シュッシュと汽車が走る動的な情景が眼前に展開する。

試しに「汽笛が 晝に 鳴りわたる」とすると、何処にでもある表現であり、普通はこのような語句が出てくる。例えば茂木高校校歌では、「鳴りとよむ汽笛のひびき ここ出でて 更に遙けし」と謡っている。

しかし東筑校歌は、耳慣れない「汽罐」(=ボイラーの意味)という語を使い、しかも誤まった助詞の使い方、「汽罐は 晝を 鳴りわたる」とすることにより、いやがうえにも抒情性が増してくるのである。

類例を上げれば、例えば、松尾芭蕉の奥の細道の中盤に

暑き日を 海に入れたり 最上川

という名句がある。一日暑い中、最上川を下り、夕刻に酒田の河口に到着した場面に置かれた句で、「暑い」という語を使いながら、逆に夕刻の涼しい海風と鳥瞰から眺める広い景色を表現した秀絶の句である。倒置を戻すと「最上川(は) 暑き日を 海に入れたり」となるが、最上川という自然物に意志があるように見せ、かつ「暑き日」という手にとることの出来ないものを「海に入れる」行為をさせている。

平叙文では誤りとされるこうした助詞の誤法で、日本語の抒情的な表現力が培われてきたものである。

「暑い」という言葉を使いながら、助詞や言葉の組合せで、逆に「涼しい」イメージを醸し出す。まさに詩歌の醍醐味と謂えよう。

この句と「汽罐は 晝を 鳴りわたる」の構造、助詞の使い方が同じである。

単に汽車が走っているだけでなく、遠賀川平野の景色の広さ・明るさ、汽車の勇壮・躍動感が表現されている。東筑校歌全体でもこの行は、焦眉のセンテンスであり、東筑校歌の主情性、抒情性を形成する要素であると考えられる。

そして重要なことは、他校校歌にはこのような絶妙な表現は見受けられない点である。

修辞に関してもう一つ気付くのは、この昼の提示の前の「大獅子吼して 汽車来る 遠賀川橋 鷺地に」の文である。この文は、「大獅子吼して汽車来る」の主文に対し、「遠賀川橋 鷺地に」の目的語、形容詞の修辞が後にくる倒置の文ということである。

なんでもない修辞であるが、他の14校の校歌には、こうした倒置はほとんど見受けられない。

初期の金沢二水、上田千曲校歌から例外なく、素直な述懐の歌詞構成であり、倒置文を書かないのが折口流なのであろう。

表現する対象物の提示の順番で、「詩」が作り出すイメージが違ってくる。その目的とするイメージ表現のためには、倒置文や助詞の誤法があってもよいはずなのに、折口信夫は、少なくとも校歌歌詞の分野では、倒置の修辞法を採らなかった。これは小論の重要な指摘としておきたい。

b. 学校校歌としての作詞意図の比較

もとより学校校歌の作詞意図は、生徒に学問や友情の重要性、将来の期待、社会への貢献を教え諭す為であることは自明である。しからば各歌詞の末尾にそれらの理念が盛り込まれ、歌詞全体の纏めとして集約されているはずである。後に各高校校歌の内容を個別に見ていくが、ここでは一覧比較として各高校校歌の末尾2行を比較してみたい。

高校名	1 番の歌詞末尾	2 番の歌詞末尾	3 番の歌詞末尾
大聖寺	ほこりあり。すなほなる 吾が生活のはじめの日	ひかりあり。かぐはしき 吾が生活の充足ふ日や	新しく、きよなる 吾が生活をひらきなむ
羽咋	あゝ新しき日本と 吾等は在らむ。とこしへに	あゝ新しき日本と 吾等は在らむ。とこしへに	あゝ新しき日本と 吾等は在らむ。とこしへに
三戸	聴け わがあぐる朝の声 庭教室にあがる声	勤しむ友の額を見よ はたらく我の汗を見よ	清き 三戸びととして 若き 陸奥びととして
茂木	日々のわがいとなみに 町は今 響きを交す	文字清く みな活きて ああ 知識 胸に沁み来る	よき文化 かをり合ふ ああ たのし われら努めむ
鳥羽	こだまを返し響くなり。 然 学校の名をあげむ。	わが読む本の行と行 知識と生きて光るなり。	近づく明日を豊かなる 望みを持ちて迎えなむ
東筑	身は健かに 気宇ひろく 筑紫の海の如 あらむ	心ただしく 才高く 筑紫の山の如 あらむ	智慧明らかに 認識よく 筑紫の空の如 あらむ

大聖寺高校は、誇りをもって素直で清らかな「吾が生活」の充実を願うことがテーマになっている。

羽咋高校は、新生日本とともに永遠に、吾等は生きていこう、と繰り返しているだけになった。

三戸高校は、意味は通ずるが、1番から3番までの内容の位相が違いすぎる。

茂木高校も内容に位相の違いがあるが、3番の「ああ楽しわれら努めむ」が教え諭すところか。

鳥羽高校は、名誉、知識、希望という校歌作詞の要素は盛り込まれて、ポイントは押さえているが、平易平板すぎる。

そして東筑校歌を読めば、一目瞭然で、全く特異な表現方法、内容の均質性と拡張性を発見する。

心身の健全と気概を海に託し、倫理と才能の均衡・合致を山に託し、知と精神の涵養を空に託し、そのような海、山、空を鏡として自己修練すべきとする。嫌味がなく方向性が明確である。

またこの3つのリフレインは、言葉の繋がりとして絶妙であり、音韻としても力強く滑らかである。

詩としての纏まりと意図の明確さにおいて、他校校歌を隔絶しているものである。

仮に「身は健かに 気宇ひろくあらむ」「心ただしく 才高くあらむ」「智慧明らかに 認識よくあらむ」とした場合には、歌詞がどれほど平板になることか。ここに「筑紫の〇〇の如 あらむ」と置いたことが、作者のセンスであり、「詩」を平板な語句から更に反省的に「昇華・結晶させた認識」へ、また別次元へと誘う作為と規定した場合、東筑校歌はまさに「詩」として成功したものと言える。

c. 学校校歌の内容制約と音韻の重要性、そして各校校歌比較

言うまでもなく学校校歌は、生徒に母校の存在趣旨を教え、事あるごとに皆で合唱するものである。そして校歌の歌詞には、心身の健全、気概、倫理、知識、友情、伝統、謙譲、将来への期待、社会へ

の貢献などの理念が格調高く網羅されなければならない、また音符に乗せて歌うためには、歌いやすい音韻をもつ語句を選択しなければならない、という大きな制約がある。

更に、これらの理念・観念を数多く盛り込まなければならないとして、しかし観念語を並べただけでは他校との差異が無くなってしまう。必須ではないが、地域特性や地方の固有名詞を付加することによってその高校独自の存在感を示すことも望まれる。

こうした学校校歌に与えられる非常に厳しい制約条件を念頭において、以下各校校歌を概括してみる。

石川縣立 大聖寺高等学校校歌

(昭和26年2月22日制定)

1.	2.	3.
朝なり 晴る山なみに	晝なり 鐘ぞ鳴りひびく	夜なり 高く燈をあげて
今日の日ひろくさしわたる	知識は胸をかざやかし	静かにむかふ窓の前
野を見よ 光る水の面。	技藝あかるく身に照れり	自然のこころ いと深く
ああ とよみくる街のおと	ああ 学問と散策と	ああ 人文のきはみなき
ここに生ひたち 身はわかし	ひとつに享くる若き幸	わかき日本を信じつゝ
ほこりあり すなほなる	ひかりあり かぐはしき	新しく きよなる
吾が生活のはじめの日	吾が生活の充足ふ日や	吾が生活をひらきなむ

先ず地域を示す固有名詞がないことに気付く。先に示した高校15校歌のほとんどが、なんらかの固有名詞を蔵しているに比べ違和感がある。まさに観念語の歌詞である。また一方これ以前の歌詞に比べ、表現が非常に平易になっている。教え諭すところは、若い率直な態度で学問と日々の反省を続ける「吾が生活」の充実という小世界に留まっている。

末尾の2行が、音韻として1番から3番にリフレインとなっているが、これ以前に製作された5校の校歌にこうしたリフレインは見えず、この大聖寺高校が初めてである。

石川縣立 羽咋高等学校校歌

(昭和26年6月10日制定)

1.	2.	3.
沙丘に朝の日ぞのぼる	晝風ぎわたる野を越えて	ゆふべとどろく邑知潟
みな出でて見よ 水や空	ひびく 羽咋の杜の鐘	はるばる霞む気多の浦
深き心は海に得て	心澄み行く清き音は、	清き渚をゆびざして
知識いよいよ明らかに	高き希望に生きよとぞ	ここに誓はば、わが友よ
天つ空よりひろき胸	微妙じき思ひ胸を揺り	学問 國を清しくし
世にまじはらむ。輝やかに	ああ鳴りわたる鐘の音	郷は 禮讓和みなむ
古國 能登に生ひたち	故國 能登のよろしき	古國 能登を思へば
使命はいよいよ若わかし。	使命はいよいよ饒々し	使命はいよいよ遠どほし
ああ新しき日本と	ああ新しき日本と	ああ新しき日本と
吾等是在らむ とこしへに	吾等是在らむ とこしへに	吾等是在らむ とこしへに

地域の固有名詞は、「羽咋の杜の鐘」と「ゆふべとどろく邑知潟、はるばる霞む気多の浦」で提示されるが、そこからの展開は、「心澄み行く清き音」「清き渚をゆびざして」で、静的な印象である。一幅の叙景詩に学校校歌に必要な生徒激励の言葉が重なっている。

1番から3番はほぼ同質に、知識、高き希望、学問をもって新しき日本を作る使命があると教示している。「古國」(フルクニ)以降の4行の1番から3番の同じ言葉を繰り返しのリフレインは、大聖寺校歌よりも明確になっている。言葉の繰り返しによる歌としての印象点の強化に思い至ったのであろう。しかしながら古風な表現の「高き希望に生きよとぞ」「故國 能登のよろしさ」「郷は 禮讓和みなむ」の音韻は、歌い易いものとは言えないと思われる。

この大聖寺、羽咋の石川県の2校は、養子とするものの硫黄島で戦死した一番弟子の藤井春洋(折口春洋)の故郷でもあり、とくに思い入れがあったのであろう。春洋の兄に宛てた書簡で製作の事情などを紹介しているので、折口信夫自身の手になるものは確実である。

1番から3番の朝昼夜の歌詞構成、文語体ではあるが平易で素直な表現、学業精励による新日本への貢献期待、歌詞後半のリフレインという形式が、折口信夫の到達した新しい学校校歌のプロトタイプになったと思われる。

その後、この形式を踏襲している校歌は、桔梗が原高校、佐沼高校、下妻高校、東筑高校であり、八戸市立工業高校、三戸高校、茂木高校、鳥羽高校は、歌詞後半のリフレインがなくなっている。既成の形式を越えて芸術性が高まるならば進歩といえるが、残念ながらそのようには見えない。

やや強引であるが、筆者の結論を先走って言うと、桔梗が原高校、佐沼高校、下妻高校、東筑高校の校歌は、折口信夫自身か若しくは近い弟子が作詞したもの、八戸市立工業高校、三戸高校、茂木高校、鳥羽高校校歌は、それよりやや離れた、折口先生の最新の校歌製作パターンに気付かず、しかし折口先生の言葉遣いや歌い口に慣れた忠実な弟子の手によるものではないかと思う。

ここで傍系の試論としていた青森県の八戸市立工業高校と三戸高校の相似を検証し、私見の補完としたい。

青森県八戸市立工業高等学校校歌

(昭和26年11月3日制定)

1.	2.	3.
晴れよ。 ^{みちのく} 陸奥。青々と	曇れ。日本。くもるとも	しづかに暮るる夜の燈に
^{やまなみ} 山脈 大野 わたつみも	^{しば} 姑し天雲 霽れむ間ぞ	けふの一日を 省みむ
輝けり。ただに ^{ひとついろ} 一色	眞晝 空片かげりして	怠らず 学問せしか
暁の光りほおよぶ	馬淵川 そよぎ澄みゆく	はげみつつ技能か練りし
大路 ^{やちまた} 八街 塔 薨	^{ひな} 地方といへども ^{ほつみぎき} 最頂崎	春かぐほしく よき希望
またそそり立つ学校や	青森縣のよき都市に	ここに廻りて來む日まで
若々し そこに勤しむ	生れ來し恵みの深さ	努めむよ。学生として
みづみづし わが層に照る	このほこり 身もてこたへむ	すがすがし 若人として

青森縣立 三戸高等学校校歌

(昭和27年 12月1日制定)

1.	2.	3.
山は青空 今日も晴	三戸びとの出でて見る	しづかに更くる馬淵川
朝戸開かむ いでわれら	目路 南北にうち開け	反省の夜となりけり
日に仰ぎ見る 東の	奥羽街道輝けり	今日は悔いなく過ぎにしか
長根朗らに明けわたる	然 はるかなる わが知識	明日のかまきは足らへりや
ああ とりよるふ名久井岳	昼なり とよむ町にして	甦りくる日本に
三戸びとよ はらからよ	秩序しづけき山に野に	すがしく生きむ ああわれら
聴け わがあぐる朝の声	勤しむ友の額を見よ	清き 三戸びととして
庭教室にあがる声	はたらく我の汗を見よ	若き 陸奥びととして
三戸 三戸 ああ 三戸		
三戸輝け さんとして		
ああ 三戸高校		

この2校校歌を並べると言葉遣いの全く同一であることが読めるはずである。また歌詞の構成面では、1番は晴れた朝に「そそり立つ学校」の「庭教室に」元気な若者の姿がある。2番は「青森県のよき都市」の「とよむ町」に生まれ、働くことに感謝し、3番では「しづかに更くる馬淵川」の音を聞きながら「けふの一日を 省みむ 怠らず 学問せしか」「今日は悔いなく過ぎにしか」と反省し、「すがすがし若人として」「若き陸奥びととして」生きむ、と歌う。

どちらも1番から3番を通じてあまり観念的な用語はなく、地域の固有名詞が散りばめられている。とはいえ提示する山河が唐突であり、その山河のイメージを醸し出す形容詞が少なく、叙景の絵姿は見えてこない。羽咋校歌の叙景修辞に遠く、大変失礼ながらこの2校の校歌は、折口信夫の手になるものでなく弟子の一人が両校校歌を代作したものと推定する。

さて本題に戻して、東筑高校校歌製作以降の茂木、鳥羽両校を見ていきたい。

栃木縣立 茂木高等学校校歌

(昭和28年2月25日制定)

1.	2.	3.
国境に よき里ありて、	鳴りとよむ汽笛のひびき	しづかなる夜となり行けば
山高く、川遠じろし	ここ出でて 更に遙けし	田居 野面 谷の入りまで
歴史あり、未来ゆたけき	馬 車 人雑沓す	かがやかに 燈影列る
下野の茂木の町	下野の茂木の町	下野の茂木の町
朝の風 山より到り	晝の日は、田の面に反し	遠き代ゆ 里に傳へし
野に吹きて すがしき時	わが額 汗に光る	家々の 祖のをしへ
疾く起きて をちこちす	聲張りて 書讀めば	花ぐはし 近代の
日々のわがいとなみに	文字清く みな生きて	よき文化 かをり合ふ
町は今 響きを交す	ああ 知識 胸に沁み來る	ああ たのし われら努めむ

固有名詞は「下野の茂木の町」だけであり、これは山河の固有名詞でなく叙景のイメージはない。教示するところは、日々の営みを正しくし、書により知識を得て、伝統文化を楽しみ近代文化に貢献することがわれらの努めであると読める。しかし、これだけだと大聖寺、羽咋両校にある「新生日本の若者の使命」というスケール感から大きく後退していることは否めない。あまり整理のついていない作品と思う。

三重懸立鳥羽高等学校校歌

(昭和28年2月1日制定)

1.	2.	3.
清き渚の松に見よー	晴れよ神島。 水や空	沖は、いさり火つらなりて
心すがしく我等あり	青一色の海原に、	しづかにひびく汐の音ー。
深き汀の波に聴けー	答志、菅島、坂手島	夕さり来る窓の上に
思ひゆたかに我等あり。	並びよろしきの晝の風ぎ	我また一つ燈をあげて、
ここに集ひてうちあぐる	ああ言ひ知らぬ風光の	一日のあとを省みむ。
若きわれらの朝の声	中の一つぞ わが校舎。	人の心をきずつけず
遠海山の境越え	明るき庭に、教室に、	我もあやまちなかりしか
伊勢に、三河に、はた尾張	波かがやかに照り返り、	わが学廣く、才高く
こだまを返し響くなり。	わが読む本の行と行	近づく明日を豊かなる
然 学校の名をあげむ。	知識と生きて光るなり。	望みを持ちて迎えなむ

鳥羽高校に光りあれ。

あゝ清くして 輝やかに

鳥羽高校よ とこしへに。

地域固有名詞としては、「遠海山の境越え」「晴れよ神島」「答志、菅島、坂手島」がある。伝統継承の「然学校の名をあげむ」、「ああ言ひ知らぬ風光の中の一つぞ わが校舎」があり、その中で「知識と生きて光るなり」と学業の重要性を論ず。そして「わが学廣く、才高く 近づく明日を豊かなる 望みを持ちて迎えなむ」と結ぶ。方向性は一応の論理的展開になっている。

1番の「清き渚の松に見よ」、2番の「青一色の海原に 答志、菅島、坂手島 並びよろしきの晝風ぎ」、3番の「沖は、いさり火つらなりて しづかにひびく汐の音」と、さすが鳥羽らしく海辺の要素が多いが、これも形容詞が平板で叙景イメージが不足する。

以上、他校の校歌を必要以上に苛めた感があるが、東筑校歌を見るとどうしてもそのような感想を持ってしまう。

ここから東筑高校校歌を見ていくが、その前に他校校歌に共通する特性を一度整理してみたい。

先に見たように昭和26年の大聖寺校歌以降、朝昼夜の時制とそれに配当するイメージがあり、朝の澁刺とした気分、昼の勉学の環境、夜の反省・思索が共通する形式である。そして古語、漢語の言葉は次第に平易な、読みやすい文語体になってきた。しかし音韻としては、けっして声に出して歌い易いものでないと感じられる。

もう一度、初期の昭和24年～25年の金沢二水高校、上田千曲高校、氏家高校校歌を読み返していただきたい。これらが歌人折口信夫の本来の歌い口であったということを考えると、以降の各校歌でもその基本的な歌い口は共通である。即ち、自然物を前にした叙景的センテンスが多く散りばめられており、それに観念・理念の言葉が追随する。その叙景は静的であり、淡々とした記述で展開され、詩想全体のイメージも絵画的、客観的に捉えられている。

このことを踏まえて東筑高校校歌を読むと他校校歌群とは全く違う雰囲気呑み込まれてしまうはずである。

福岡県立東筑高等学校校歌

(昭和27年11月22日制定)

1.	2.	3.
筑紫の国の 国の崎	大獅子吼して 汽車来る	ここに日本はじまれる
とほく霞みて、海に入る	遠賀川橋 鶯地に	筑紫に 吾等生れあひ
遠賀の水門も 望むべし	汽罐は晝を鳴りわたる	ああ言ひ知らぬ 誇らしさ
目翳をかざせ 汐境	折尾の空に 聳るもの	鉦坑にとどろくもの声は
響灘 玄海の波	青嵐 丘をめぐりて	甦り来る 国の音
澄みわたる 朝の幻	すがすがし わが学校	さ夜深き 皿倉おろし
馴れ馴れて 海の若人	若き日の 代々の先輩	ともし火を 高くかかげよ
吾こそは 洋の独り子	年を経し わが伝統	あきらかに わが道を見む
吾らかく 若々し	吾らかく 勤しめり	われらかく さやかなり
身は健かに 気宇ひろく	心ただしく 才高く	智慧明らかに 認識よく
筑紫の海の如 あらむ	筑紫の山の如 あらむ	筑紫の空の如 あらむ

よきかな東筑 うるわしく

東筑 東筑 寛かなれ

ああ 東筑

地域固有名詞は、「遠賀の水門」、「響灘 玄海の波」、「遠賀川橋 鶯地に」、「折尾の空に 聳るもの」、「さ夜深き 皿倉おろし」と1番から3番まで均等に、そしてその提示がそれぞれの歌詞の中で統一感をもって活きている。

1番の海の提示は、馴れ馴れて 海の若人～吾らかく 若々し～身は健かに 気宇ひろくに繋がっている。潮風に焼けた健康的な若者と海の広さと同じくらいの気概を提示している。

2番の遠賀川橋を走る汽車の姿は、交通の要衝である折尾に入り、折尾の空に聳る丘の学校、それは若き日の激情の青嵐が舞う学び舎であり、代々の先輩がおり、年を経しわが伝統となり、その中で「吾らかく 勤しめり」と連続したイメージで次々に展開している。5行目の「青嵐、丘をめぐりて」という青春時代の激情を表象する詩的な言葉も他校校歌にない特徴である。

3番の鉦坑にとどろくもの声は、国の復興の声であり、坑内のカンテラの光のイメージが、高く掲げた灯火とだぶってわが道を明らかに照らしている。先に見たように他校校歌の3番の夜については、「静かな反省・

思索の夜」でイメージされていることが多いが、東筑高校だけは、未来を照らす明るい「ともし火を高く掲げる夜」であり、積極的・能動的な夜になっている。

1番から3番に共通する末尾2行のリフレインについては、先に検証した通りである。心身の健全、気概、倫理、知識等々の教え諭すべき理念・観念が、自然や産業、歴史事象に違和感なく十分に盛り込まれ、作詞意図が最後に明確に謳われている。

そして何と言っても、謳われている観念・事物のスケール感が抜群であり、全体的な統一感がある。

また東筑校歌の音韻の滑らかさ、力強さは、各校歌詞を繰り返し読んで実感するしかないが、因みに歌詞の音数を比較してみると歌い易い理由の一端が、即座に了解される。下表は、折口信夫の手になる羽咋高校校歌と東筑両校歌の歌詞の句切れで音数の数字入れてみたものである。

石川懸立 羽咋高等学校校歌

(昭和26年6月10日制定)

1.	2.	3.
沙丘に 4 朝の日ぞのぼる 8	晝風ぎわたる 7 野を越えて 5	ゆふべとどろく 7 邑知潟 5
みな出でて見よ 7 水や空 5	ひびく 羽咋の 7 杜の鐘 5	はるばる霞む 7 気多の浦 5
深き心は 7 海に得て 5	心澄み行く 7 清き音は、 5	清き渚を 7 ゆびざして 5
知識いよいよ 7 明らかに 5	高き希望に 7 生きよとぞ 5	ここに誓はば 7 わが友よ 5
天つ空より 7 ひろき胸 5	微妙じき思ひ 7 胸を揺り 5	学問 國を 6 清しくし 5
世にまじはらむ 7 輝やかに 5	ああ鳴りわたる 7 鐘の音 5	郷は 禮讓 7 和みなむ 5
古國 能登に 7 生ひたち 4	故國 能登の 7 よろしさ 4	古國 能登を 7 思へば 4
使命は 4 いよいよ若わかし 9	使命は 4 いよいよ饒々し 9	使命は 4 いよいよ遠どほし 9
ああ新しき 7 日本と 4	ああ新しき 7 日本と 4	ああ新しき 7 日本と 4
吾等是在らむ 7 とこしへに 5	吾等是在らむ 7 とこしへに 5	吾等是在らむ 7 とこしへに 5

福岡縣立東筑高等学校校歌

(昭和27年11月22日制定)

1.	2.	3.
筑紫の国の 7 国の崎 5	大獅子吼して 7 汽車来る 5	ここに日本 5 はじまれる 5
とほく霞みて 7 海に入る 5	遠賀川橋 7 驀地に 5	筑紫に 吾等 7 生れあひ 5
遠賀の水門も 7 望むべし 5	汽罐は晝を 7 鳴りわたる 5	ああ言ひ知らぬ 7 誇らしさ 5
目翳をかざせ 7 汐境 5	折尾の空に 7 聳るもの 5	鉾坑にとどろく 7 もの声は 5
響灘 5 玄海の波 7	青嵐 5 丘をめぐりて 7	甦り 5 来る 國の音 7
澄みわたる 5 朝の幻 7	すがすがし 5 わが学校 5	さ夜深き 5 皿倉おろし 7
馴れ馴れて 5 海の若人 7	若き日の 5 代々の先輩 7	ともし火を 5 高くかかげよ 7
吾こそは 5 洋の独り子 7	年を経し 5 わが伝統 5	あきらかに 5 わが道を見む 7
吾らかく 5 若々し 5	吾らかく 5 勤しめり 5	われらかく 5 さやかなり 5
身は健かに 7 気宇ひろく 5	心ただしく 7 才高く 5	智慧明らかに 7 認識よく 5
筑紫の海の 7 如 あらむ 5	筑紫の山の 7 如 あらむ 5	筑紫の空の 7 如 あらむ 5

羽咋高校校歌は、7音5音をベースにしながらも4音句切れ、8音句切れがリフレインの節にあり滑らかでない。他校校歌も同様に7音5音をベースにしながらか、何箇所かに4音句切れを見ることが出来る。その点で東筑校歌はキッチリと7音5音となっており、途中5音7音の転調部分も効果的に納まっている。

d. 東筑校歌の「主観的抒情」

ここまで語句の構成や音韻で歌詞の違いを見てきたが、さらに決定的に違うのは、東筑高校校歌の持つ雰囲気の違いである。

それは、東筑校歌の歌詞全体に一人の若者の視線、主体性が追えるところである。

海に入って響灘の潮境を目翳をかざして見て、折尾の空に聳る学校の中で勤しむ自分の姿を見て、小夜深き夜のともし火に照らされた自分の道を見ているのである。

他校校歌にも「吾」は見えるが、どこか他所から眺めているようであり、感情は平坦に見えるに比べ、東筑校歌の「吾」は主体そのものであり、動的で主観的な力が表現されている。「吾」の感性や息遣いが文字づらから伺えるようである。

他校校歌は、風景の中に若者がいるが、東筑校歌の場合は、若者が風景の方を見ている。

そのような雰囲気の違いがある。

これを「主観的抒情」と表示したい。

このような主観的抒情の高等学校校歌は、全国津々浦々の5千を超える高校校歌のなかにあっても異質であり大変ユニークな校歌であろうと思う。学校校歌という性質上、ここまで冒険的な歌詞は、一般に受容されないはずだからである。

さてこれまで検証してきたことで、東筑校歌が近代詩としての抒情性に溢れ、詩想の統一感とともに、声に出して歌う優れた音韻で構成されていることが判ってきた。

他の14校の校歌とは形式面や用語に共通するものがあるものの、内容と表現方法は、他校と全く異なり異彩を放っている。これは東筑校歌作者が、折口信夫でないことを示している。

では誰がそれを作りえたか。

5. 東筑校歌の作者の推定

(1) 東筑校歌作者の条件

戦時中の観念的な言語の氾濫に対する反省あるいは反撥から、戦後の文芸は、プロレタリア文芸の復権と相俟って、リアリズム、写実主義の表現方法が主流となった。しかし程なく、そのリバウンドでの日本浪漫派への回帰もあったと聞いている。上記でみてきたように東筑校歌は、リアリズムや写実主義の冷静、客観のものでなく、主観的抒情で綴られた近代詩そのものであり、戦前の日本浪漫派作品のような抒情に彩られている。

よって東筑校歌の真の作者は、古典短歌の碩学である折口信夫に師事しながら、一方では主観的抒情性の溢れる近代詩も逞しうする文芸人でなければならない。

折口信夫とその弟子達のグループに属すも、別のグループにも交流の輪を広げている文芸人。

とすれば、伊馬春部しかその条件を満たす者はいない。

(2) 東筑校歌の作者が伊馬春部である可能性について

伊馬春部の生涯については、劇作家 棧比呂子氏（佐々木博子氏）の近著『やさしい昭和の時間—劇作家 伊馬春部』（2008年10月初版、海鳥社発行）の労作が素晴らしく大変に参考になった。以下その抜書きを含めて標題の検討を行いたい。

伊馬春部は、1908年に木屋瀬の商家に生まれた。因みに東筑高校校歌制定の昭和27年、1952年は44歳である。鞍手中学の頃より文才に恵まれ、決して裕福な家計でなかったが何とか國學院大学予科（1926年・昭和元年）に進むことができた。ここで釈超空・折口信夫先生から短歌指導を受けられるサークル「鳥船」に引き寄せられるように参加し、以来折口の他界を看取る昭和28年まで親しくその薫風を仰ぐことになった。それは伊馬春部自身が次のように証言している。

「とにかく、『人間としての触れあひ』が第一信条であること、『文学青年らしい白けた欲望』などは潔く捨て去るべきであることなどは、われわれには痛いほど浸透した。そして作歌に於いては、対世間、対社会的欲望には目もくれず、ひたすら鳥船びととしての道を歩むことに専念した」

折口の短歌と人間学に師事しながら國學院大学卒業の1931年・昭和6年に井伏鱒二に師事、その門下の小山裕士、壇一雄らと出会い、ほどなく太宰治と親交を深めることになる。

ちょうどその頃に発足した新劇中心の舞台である「ムーラン・ルージュ新宿店」で上演される劇の作品を手がけるようになった。伊馬春部の作品は、シャレテユーモアもあり一躍人気作家となっている。

1934年・昭和9年に山岸外史、太宰治、壇一雄、小山裕士らと文芸誌『青い花』を創刊。（誌名の『青い花』はドイツロマン主義の先駆的小説であるノヴァーリスの「青い花」に拠ったものである）『青い花』は翌年休刊となるが、そのまま「日本浪漫派」に合流した。その同人誌『コギト』第3号に「伊馬鶴平」の名で同人として迎えられ、伊馬は『コギト』第5号～8号に戯曲や感想文を寄せている。

「日本浪漫派」の理論家である保田與重郎と折口信夫の日本の古典に対する姿勢の違いが如何であったかという批評は、筆者にはその資質も能力もなく諦めざるを得ないが、伊馬が一時「日本浪漫派」の抒情性に近いものがあつたことは言える。

その頃から戦中、戦後まで出征中を除いて、伊馬は劇作家として或いはラジオドラマの作家として活躍を続け、この間多作であつたと見える。

以上、焦点である東筑高校校歌の実現性に関連するものだけを抜き出したが、その主観的抒情を折口流の形式に織り込んで、校歌というジャンルでは、やや異質な躍動感溢れる校歌を作成し得たのは、これらの状況証拠から伊馬春部しかいないと考える。

もっと端的に要素の違いを付け加えれば、折口信夫（およびその弟子達）の詩作は、文字による表示が主体であるに対し、伊馬春部のそれは音声による表現が主体であると思う。まさにラジオの音声によるイメージ伝達を修練、得意とした伊馬春部の面目躍如であろう。

(3) 結びに代えて

伊馬春部は母校の要請に応じて新製の鞍手高校校歌を東筑校歌の前年に作詞している。

福岡県立 鞍手高等学校校歌

(昭和26年4月15日制定)

1.	2.	3.
新しき時代に生きて	新しき時代を担ひて	すずかけのもとにいこひて
新しき世紀を創る	自主自由自律をほこる	すずかけの風をさきつつ
若人よ まなじり上げよ	若人よ耳かたむけよ	語りなむ若き世代を
つねのごと福地の高嶺	つねのごと遠賀の流れ	つねのごと校庭のかなたは
秀でつつ永久に清らに	絶ゆるなきひびきに鳴りて	ゆるぎなき歴史に栄えて
はぐくまむとす若き力を	うるほさむとす若き命を	かがやけるかな石炭の層
希望に燃ゆる若人が	清きを愛ずる若人が	未来を誓ふ 若人が
集まるどころ 鞍手	集まるどころ 鞍手	集まるどころ 鞍手
鞍手高等学校 わが母校	鞍手高等学校 わが母校	鞍手高等学校 わが母校

この鞍手高校校歌を読んで、先に見た折口信夫の15校校歌のうち、同じ昭和26年の佐沼高校校歌を思いだした。

宮城県 佐沼高等学校校歌

(昭和26年8月 作詞)

1.	2.	3.
ひんがしに よき國ありて	野に出でて 聴け水の音	栗駒の 空夕やけて
北上の遠山を	晝深きせせらぎは	しづかなる夜の思ひ
朝空に垣とせり	遠く来て とはく去る	陸奥の荒野らを
心すぐなるよき人の	迫川その瀬のそよぎ	悉皆田に墾りし祖々の
常に和みて住むところ	日々に学問新しく	代々の経験 とほけれど
われら 清しく行き交ひて	技術とりどり潔らかに	匂ひやかなる近代の
若き禮讓 里に充つ	青春とこしなへならむ	知識の外のものならず
いさざよし 我が佐沼	みづみづし 我が佐沼	かがやかし 我が佐沼
ああ 佐沼高等学校	ああ 佐沼高等学校	ああ 佐沼高等学校

鞍手、佐沼両校歌とも、等しく歌詞1番が若人の素直さや決意を命じ、2番はその若人の活動を称え、3番にて歴史に寄与する意義を伝えており、末尾2行のリフレイン、しかも最終行は母校の名を繰り返す。「折口校歌」の15校校歌の分析の中で、この佐沼高校校歌の末尾2行が他の校歌の類例になく、何か違和感があったが、ここにようやくその類型を見たのである。

この伊馬春部作の鞍手高校校歌を見ると音韻の滑らかさはあるが、語句は平易平板である。東筑校歌のような大胆な修辞や主観的抒情は、まだ伺えない。そうすると何か東筑校歌だけは、伊馬春部のインスピレーションが溢れるようになってきた時期に製作されたということになり、折口信夫の死の直前に、遠賀川を良く知る文芸人がその傍らにいた奇遇は、東筑同窓生が享受すべき歴史上の幸運と言える。

【東筑71期 佐野和範】

[補足]

筆者の想定する折口信夫名の15高校校歌の分類

1. 昭和24年、25年の校歌群

まだ朝・昼・夜の構成形式になく、やや擬古的であるが、折口信夫流儀の作詞。

金澤二水高等学校
上田千曲高等学校
氏家高等学校
鹽竈高等学校
瀬戸高等学校

2. 昭和26年8月までの3校校歌

朝・昼・夜の構成形式確立、1番～3番の同一単語または同種概念のリフレインによる「歌唱」の効果を意図した折口信夫自作と思われる校歌。

大聖寺高等学校
羽咋高等学校
桔梗が原高等学校

3. 弟子達による作詞（一部折口信夫が加筆している前提）

伊馬春部作＝鞍手高等学校(昭和26年4月)

